

事例を読む

幼稚園でアートが生まれる時

刑部育子

アートが生まれる時

お茶の水女子大学附属幼稚園には、自然豊かな園庭がある。吉岡晶子先生の実践「チョークでアート」は、この園庭の中で生まれたアートであった。この実践は始めから「これをしよう」という教師の強い意図や計画ありきで生まれた実践ではない。子どもの行為や表現、小さな発見を教師が拾い、細やかに受け止めながら、子どもと共に楽しむ中で展開し、生まれたアートだった。

クラスの子どもたち（四歳児）が保育室の黒板にチョークを使って描いていることを見ていた吉岡先生は、ある日「お庭で描いてみる？」と提案する。

保育室の黒板は何かを書く・描く場所として子どもたちは認識していたが、園庭で描くということは子どもたちにとって初めての経験であったから、「え？いいの？」と戸惑っている様子だったという。「え？いいの？」という言葉の中に、子どもたちなりに「描いていい場所」と「描く場所ではない」もしくは、「描いてはいけない場所」などの区別があるということがうかがわれる。この時に先生は「消えるところには描いても大丈夫よ」と言い、たわしでチョークをこすり、「これでこすって消えるところにしてね」と伝えたそうである。すると、子どもたちは嬉々として「こども消える！」「あそこも消える！」と言って確かめながら描き始めたという。「消えるところには描いても大丈夫よ」という絶妙な教師の応答から、「チョークでアート」の実践が生まれたのだと筆者は納得したのであった。

Réaction と 子どもの教育

メルロ・ポンティは、大人が子どもに一方的に教

授刺激を与えて成立する事態としてとらえる近代教育学の発想を問い直し、子どもの action (行為) に対して大人が reaction (筆者はフランス語の reaction を日本語に訳し直すとしたら、「応答」という言葉がふさわしいのではないかと考えている) することとして教育をとらえた(西岡 二〇〇五年<sup>註1</sup>)。メルロ・ポンティは相互の応答的關係、もしくは對話的關係の中で意味が生成されること、表現(表象 representation) が作り出されることに、教育の重要な営みがあると考えた。

吉岡先生の実践には、この reaction (応答) としての教育が溢<sup>あふ</sup>れていると思う。子どもどのような action (行為) にも、吉岡先生はさらにその活動が楽しいものとなるように応えていく。「消えるところには描いても大丈夫よ」と応えた教師の reaction は、小さな子どもでもすでもついている「こうしなければならぬ」という大人や社会から求められる暗黙の制約から、心を解き放ったのではないだろうか。幼稚園が自由でのびのびとした探求を安心して行え

る場であることを教師はこの言葉で伝えている。さらに、手渡した素材が「描いても消える」チョークであることも興味深い。チョークは何度でも書き直せる素材であり、このことはいっそう自由な気持ちで子どもたちは描くことを楽しめたのではないだろうか。

「チョークでアート」は、さらに、描く活動にとどまらなかった。ある子どもは、園庭にあったプラタナスの木にチョークで色をつけてみる。すると、プラタナスの木の肌の色が変わり、色味が地面に描いた時とも違うことを発見する。そこへ、教師も「どれどれ見せて」と言って寄り、一緒にチョークの色がどのように木の肌に染み込むのかを楽しむ。他の子どもも何をしているのかなと寄っていく。ここにも教師の「どれどれ見せて」という子どもの action (行為) に対する reaction (応答) が子どもたちの活動をいっそう活気づけている。

さらに、プラタナスの木肌に刷り込むようにチョークで色をつけると、チョークの粉がばらばらと地

面に向かって美しく散る様子、散った粉が地面で混ざり合って、不思議な色彩になった様子を子どもたちは先生と共に味わう。次々と子どもたちが試しては驚きをもって発見して楽しんでいた姿が目には浮かぶ。このような経験をしている時に、大人が楽しげなまなざしで傍らにいてくれたのなら、子どもはどんなにか安心してさらなる表現に向かえることだろう。こうした環境が幼稚園にあるということがありがたいことと思う。

## プロセスとしてのアート

「チョークでアート」がいろいろな展開を見せた背景には、子どもの表現を経験の連続としてとらえるという表現観があったのではないかと思われる。それは、子どもが生み出していく表現を固定化された作品としてだけではなく、子どもの探求する経験のプロセスそのものをアートとして大切にされていたのではないかということである。

デューイは著作『経験としての芸術』(Art as

Experience)の中で、結果として残る作品だけが表現 (representation) ではなく、作り、作り変えていくプロセスこそが表現であるとしてアートをとらえた。

吉岡先生の実践では、冬に行われた「チョークでアート」の前に、五月の色水遊びで、子どもたちは色水を作り、いろいろな発見をしてきた経験をもっていた。そのことが、描くことにとどまらない「チョークでアート」の活動を生み出したのではないかと考えられる。チョークという素材とプラタナスの木の肌から醸し出される独特な色合いの発見は、今までの色水でいろいろ試した経験が子どもにあったからこそのものであろう。

子どもたちは幼稚園の生活の中で、日々驚きをもっているいろいろなことに出会い、発見している。そのような一人ひとりの子どもの小さな発見に教師が気づき、共に楽しげに味わう時、他の子どもたちもその楽しい様子に気がつき、何か面白いことが幼稚園の中で起きていることが周りにも伝わるのだろう。

また、子どもたちのある時の発見が、長い時間経ったある時に、偶然にもその続きとなるような活動が生み出されていくこともある。このようなかつての経験が、ある別の活動の中で、結び付いた経験として、さらに深まった表現に結び付くこともある。経験の広がり、連続性を大切にして生み出されたアートこそ、プロセスとしての表現、経験としてのアートといえるのではないだろうか。

### 発見した喜びを共に味わうことの意味

最後に、幼稚園という場でアートを通した学びの喜びを仲間と共に、あるいは大人と共に味わうことの意味を、イタリアのレッジョ・エミリア市のアトに富む幼児教育をつくってきたローリス・マラグッツィの言葉をお借りし、味わいながら本文を終わることとしたい。

### 理解する喜び

子どもたちがひとり、また仲間とあるいは大人

と一緒に学び、知り、理解する楽しさは、一番基本的で重要な感覚の一つです。

これは非常に大変な感覚であり、その感覚をさらに磨くことが必要です。そうすれば、現実に直面した際に、学び、知り、理解する事はけして容易なことではなく、多大な努力も必要であることがわかって、その楽しみを持ち続けられるでしょう。

そしてこのような感覚が長続きすれば、楽しみは真のよろこびへと姿を変えていくでしょう。

(マラグッツィ『子どもたちの100の言葉』<sup>註</sup>より)

(お茶の水女子大学大学院)

### 注

1 西岡けいこ『教室の生成のために―メルローポント

とワロンに導かれて』勁草書房 二〇〇五年

2 デューイ・J. 『経験としての芸術』(河村望訳)

人間の科学新社 二〇〇三年

3 レッジョ・エミリア市乳児保育所と幼児学校『子どもたちの100の言葉』(田辺敬子・辻昌宏・木下龍太郎訳)

学習研究社 二〇〇一年 p.32